

5月14日は、母の日。



渡り廊下にあるホワイトボードに、2面を使った新聞広告とティッシュで作成した花束が生徒の目に触れられるように飾られています。

「おうちの人に気持ちを話してみませんか？」というメッセージとともに。作成した職員はいろいろ悩んだ末に、この言葉に行きついたのだと思います。「気持ちを話してみませんか？」には、感謝の気持ちなど、素敵な気持ちが必ずどの子にもあると思うからこそ、出てきた表現です。

母と特定せず「おうちの人に」というのも、母は思い出の中にしかない、などいろいろな家庭事情を鑑みての言葉だと思います。

私事ですが、少し離れた所に住んでいる娘が2歳になる孫を連れて「母の日だから」と訪問してくれました。久しぶりに話しているうちに、3日後が娘の誕生日だということをつっかり忘れていたことに気づき、「何歳になるんだっただかな？」と何気なく尋ねると、「29歳！29年間、お父さんとお母さん役をやってきたことになるね……。私も母親になってそういう気持ちが分かった」と話してくれました。

別に役柄を演じてきたとは思っていませんでしたが、何か深い思いがあった言葉なのでしょう。子育ての大変さや悩みを夜遅くまで妻に話して、帰っていききました。

母の日にちなんで、石川啄木の短歌を紹介します。

たわむれに 母を背負ひて そのあまり 軽きに泣きて 三步あゆまず

ふざけておんぶした母があまりに軽すぎて涙で歩けなくなったという短歌です。

私には耳が遠くなり腰の曲がった母がすぐそばにいます。たくさんの苦勞をかけてしまいました。今日は、今日こそは気持ちを伝えてみようかな。